

# 第 67 回日本化学療法学会総会 特別講演「日本を『未来変革』の国へ」

演者：小泉進次郎<sup>1)</sup>・司会：柴 孝也<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 自由民主党厚生労働部会長，衆議院議員

<sup>2)</sup> 東京慈恵会医科大学

## はじめに

神奈川県第 11 区小選挙区選出，衆議院議員自由民主党厚生労働部会長・小泉進次郎様をご紹介します。皆様よく御存知の小泉議員ですが，復興大臣政務官などでのご活躍はご承知のとおりです。

先日，5 月 3 日（2019 年），米国の国際戦略問題研究所（CSIS）で講演されたこと（Figs. 1, 2）は，日本の新聞に載りましたが，その時，帰りのワシントンの空港でお会いしましたという人がこの会場にいます。

小泉議員の尊敬する人物はジョン・F・ケネディ

と言っておられます。第 35 代アメリカ大統領は 43 歳で大統領になられています。小泉議員におかれましてはあと 5 年しか，あるいは 5 年もあります。そのような意味で，期待してこれからの話を伺いたいと思います。言葉には体温と体重を乗せて，皆様方に温かさ，あるいはぬくもりを感じ取っていただければとのご講演であります。現職の厚生労働部会長として，公務多忙の中おいで頂いております。学会員にとりまして，これ以上の喜びはなく誇りとするものであります。

「日本を『未来変革』の国へ」と題してのご講演，小泉議員，よろしくお祈いします。





Fig. 1. 日本の「ニューフロンティア」～22世紀を見据えた日本の「変革」とは



Fig. 2.

## 「日本を『未来変革』の国へ」

皆さん、こんにちは。座長の柴先生から大変ご丁寧にご紹介をいただきました小泉進次郎です。今日は、柴先生からお話をいただき、人生100年時代、新しい時代の社会保障改革は、何を目標しているかお話しする機会をいただきました。歴史ある67年目に突入した日本化学療法学会総会でお話しできることを、清田会長、本当にありがとうございます。

学術集会のプログラムを拝見しましたら、とてつもない数の講演とセミナーを繰り返されている皆さんですので、私のこの時間はお休みいただく時間と思って、肩の力を抜いてお聴きいただければと思います。

先週、私のかつての職場のシンクタンクのアメリカのワシントンDCで「日本の『ニューフロンティア』～22世紀を見据えた日本の『変革』とは」と



Fig. 3.

いうタイトルで講演してきました (Fig. 1)。

ちなみに「ニューフロンティア」は、ケネディ大統領の指名受諾演説で使われた言葉です。その後、宇宙探査計画、アポロ計画といったことを含めて、ニューフロンティアがケネディ大統領の政権の一つの旗頭になりました。

私は、「日本にとってのニューフロンティアは、まさに人口減少と人生100年時代だ」というお話をしました。パネルディスカッション (Fig. 2) では、会場に200人ぐらいお集まりいただき、日本は今どういう課題を目の前にしているかというお話をしてきました。

こうしていろいろな交流を深めながら、日本の未来を考えているところです。今日は皆さんと一緒に、今、日本の政治が何を考えているのか、私がどんな国づくりをしたいと思っているのかをお話しできればと思います。

### 1. 三つの100

「三つの100」。今の日本の課題は三つの100を覚えていただければ、「これが日本の課題か」ということがわかると思います。

- 1) 出生数が100万人を割った。これが一つ目の100です。98万人 (最新の数値は約92万人/2019年6月7日厚労省公表) の子どもたちですが、かつて一番多いときは200万人生まれました。今そういう状況になったのが「一つ目の100」、100万人を割ったということです。
- 2) 二つ目の100は、とうとう今年成立した予算が100兆円を突破しました。100兆円の予算を突破した最大の要因の一つは社会保障、特に医療・介護です。これに使わなければいけ

ない国家予算がものすごく膨張していることが原因でもあります。

3) そして三つ目の100は、人生100年時代です。私が今の日本の課題を一言で言えと言われたら、「三つの100だ」と言います。

この写真 (Fig. 3), 私の隣にいる人はどなたかおわかりですね。萩本欽一さん、欽ちゃんです。後ろに垂れ幕がかかっている、「人生100年時代」と書いてあります。これは私の地元、神奈川県横須賀市でおこなっている、毎年恒例の0歳からの活動報告会です。赤ちゃんが泣いてもいい、子どもが走り回ってもいい、とにかく政治を身近に感じてほしいから私の講演会に来てくださいということで、横須賀の地元でおこなっています。

人生100年時代を子どもから大人まで、赤ちゃんからおじいちゃん、おばあちゃんまでわかりやすく、楽しく聞いてもらうにはどうしようかと考えたときに、私の中で浮かんだのが欽ちゃんでした。この方は人生100年を語っていただくには相応しい。なぜかと言うと、欽ちゃんは私の父と同年です。父は77歳、欽ちゃんは78歳ですが、78歳で駒澤大学仏教学部5年生です。なぜ5年生なのか。「4年で卒業するのはもったいない」と言って、今5年目に突入しております。

私は欽ちゃんが大学に入学することをニュースで知って、なぜ70歳を超えて大学へ行こうと思うのだろう。70歳を超えて大学へ行こうと思う気持ちになったのかを知りたいと思いました。それで、本を読みました。欽ちゃんの発想に目からうろこでした。欽ちゃんにお会いして、何とかその話をしてもらいたいと思い、地元に来ていただいて、お話をさせていただきました。

欽ちゃんは、毎年、学校へ通うほどに脳が回るそうです。今が一番回っていると…。

あるテストの日、誰よりもまじめに授業に出ているその欽ちゃんが、大学に行かなかったのです。学校のみんなはびっくりしました。あれだけまじめに授業に出ている欽ちゃんが、なぜテストに出ないのか。学校の先生も心配する。18歳から22歳の主だった学生さんたちも、欽ちゃんが来ない、何かがあったのではないかと心配する。やがて欽ちゃんに連絡がついて、「欽ちゃん、どうしたの。あんなにまじめに出ていたのに、なぜテストに来ないの?」と問

いました。

そうしたら、欽ちゃん是这样いしました。「だって、僕、卒業するために来ているわけじゃないから。今テストを受けたら、たぶん僕は100点が取れない。こんな僕にみんな一生懸命教えてくれて、友達もノートを貸してくれて、一緒にわからないところを教えてくれる。先生も一生懸命教えてくれる。その僕が今テストを受けて、たぶん単位は取れるけれども100点を取れなかったら申し訳ないじゃない。だから行かなかっただけだよ」と。

みんな、その発想にびっくりです。本気で勉強している人に出会い、それからは他の学生たちが目の色変えて勉強するようになったのです。

その欽ちゃんが横須賀の講演会で、会場の皆さんに言った名言がありました。それはこういう言葉です。「もの忘れが激しくなる。70歳を超えるといろいろなことを忘れてしまう。忘れないように、忘れないようにしても出て行ってしまふ。出て行くことは、もう仕方がない。だったら、出ていく分、入れればいい。そう考えて、かつて行けなかった大学に行ってみよう。そう思うようになったのだよ」という話をしながら、「今が一番、頭が回っているよ」と言ったあとに言った一言が「皆さん、認知症予防は病院ではなくて大学に行こう」でした。講演会に来ていただいた皆さん大喜びで、明るい顔をして帰っていきました。

そういう欽ちゃんが私の中では人生100年の一つのシンボルです。

間違いないと思いますが、令和の時代、欽ちゃんのような方がいっぱい出てくると嬉しく思います。私はアメリカの大学院に行きましたが、アメリカの大学では幅広い世代が共に学びあっているように、日本はこれから、令和の時代から変わるでしょう。その先駆けが欽ちゃんだと思って、紹介させていただきました。

生きたくても生きたくなくても100年生きる可能性が誰にでもある時代になりました。

3年前から訴えてきて、若手同世代の議員と一緒に「これからの時代はこういう方向性に行くのだ」というメッセージを公に投げかけてきました。それが「ルールからの解放」という一つのメッセージです。これを見ていただくと、私が考えている国づくりの方向性がわかると思います。



## 2. レールからの解放

「レールからの解放」—22世紀へ。人口減少を強みに変える、新たな社会モデルを目指して—

2020年以降を「日本の第二創業期」と捉え、戦後続いてきたこの国のかたちを創りなおす。それは「人口減少」という確実な未来の中でも、日本が成長していくために、必要不可欠な変化である。

これまで日本社会は、一本道の「レール」を走り抜くような生き方を求めてきた。受験に始まり、新卒での就職、毎日休みなく働き続け、結婚して子どもを持ち、定年後は余暇を過ごす—

「20年学び、40年働き、20年休む」という人生こそが普通で幸せな生き方だ、と。

それに基づき、終身雇用慣行や国民皆保険・皆年金などが生まれ、これまでは実際によく機能してきた。戦後日本が丸丸となって努力し、ゼロから奇跡的な飛躍を遂げ、今日のような豊かさを持てたのは、そのような日本型経済モデルの賜物である。

しかし、人口減少による少子高齢化、さらに「人生100年」生きていくことが当たり前になる未来に、もはや戦後のやり方は通用しない。レールによる保障は財政的に維持できないばかりでなく、私たちが望む生き方とズレが生じてきているのではないか。

「一度レールから外れてしまうとやり直しがきかない」そんな恐れから小さなチャレンジにも踏み出せない。価値観が多様化しているにも関わらず、人生の横並びばかりを意識し、自分らしい選択ができない。かつて幸せになるために作られたレールが今、この国の閉塞感につながっている。

政治がその「レール」をぶっ壊していく。

もっと自由に生きていける日本を創るために。

新卒や定年なんて関係ない。「65歳からは高齢者」なんてもうやめよう。現役世代の定義そのものから変えていく。

100年を生きる時代だ。いろんな生き方、いろんな選択肢がある。

10代のうちから仕事や起業という道もあれば、大学卒業後すぐに就職しないという選択もある。転職を重ねるのも、学び直しをするのも当たり前。いつだって子育てや家族のケアを最優先できる。何かに失敗したとしても、何度でもチャレンジできる。

学びも仕事も余暇も、年齢で決められるのではなく、それぞれが自分の価値観とタイミングで選べる

未来へ。政治が用意した一つの生き方に個人が合わせるのではなく、個人それぞれの生き方に政治が合わせていく。そうすればきっと、100年の人生も幸せに生きていける。

それは同時に、働き方・生き方・教育の位置づけ、そして社会保障を見直すことにつながる。真に困った人を助ける全世代に対する安心の基盤の再構築は、小さなチャレンジや新しい人生の選択の支えになる。子育て世代の負担を減らし、現役世代を増やしていくことで、日本社会全体の生産性を高め、人口減少しても持続可能な社会保障になる。

簡単なことではない。しかし、終戦直後、敷かれたレールも無い中で一人ひとりが挑戦を続け、世界に誇る唯一無二の社会モデルを確立したのが日本という国である。むしろ先人たちが遺した豊富な資産と、日々進化する新しい技術がある今、できないことは何もない。人口減少さえも強みに変える、22世紀を見据えた新しい社会モデルを、私たちの世代で創っていききたい。

この考え方に基づいて、今、国づくりをおこなっています。一言で言えば、「日本は世界で最初に人生100年の国になる」。その100年の国を幸せで、豊かに、そして明るく、長生きがリスクではない、そういう国をつくるために、われわれは何をしなればいけないのか…。そういったことで、「レールからの解放」というメッセージをお示しさせていただきました。

## 3. 日本の第二創業期

「レールからの解放」というメッセージの中に、「日本の第二創業期」といった表現が出てきました。日本が一つの企業だと思ったときに、1945年からビジネスとしてはベンチャーが大企業になったような、うまくいった国づくり、それが第一創業期です。だけど、これからは今までのビジネスモデルで発展するとは限らない。まさに新しいビジネスモデルをこの国でつくっていかねばいけない、私たちは第二創業期だというつもりで考えようではないかということで整理したのが、第一創業期と第二創業期の比較です（表1）。

この表を見て頂くと、いかに私たち日本の形が変わってきたかがわかると思います。日本化学療法学会はペニシリン草創期の67年前から発足していま

表1 「第一創業期」と「第二創業期」の比較

	第一創業期 (1945年～)	第二創業期 (2020年～)
出発点	敗戦による焼け野原	豊富なストック 高度な技術・産業基盤
経済	製造業のキャッチアップ	技術革命
平均寿命	男性：50歳 女性：54歳 (1947年)	男性：81歳 女性：88歳 (2020年, 推計)
人口構造	人口ボーナス	人口オーナス
人生設計	一直線のレール型	網状のネット型
雇用	終身雇用(会社人)	多様な働き方(社会人)
社会保障	世代間の助け合い 高齢者への給付が中心	真に困っている人を助ける 全世代への給付
教育	平均的に質の高い人材 新卒人材の育成機関	多様性に寛容な人材 いつでも学び直し
地方	国土の画一的な発展	多様で自立した地方

ですが、第一創業期は1945年、学会の創立当初の頃と  
思っていただければいいと思います。敗戦による  
焼け野原、製造業のキャッチアップ型の経済です。

平均寿命は、戦後、日本人の男性の平均寿命が50  
歳、女性の平均寿命が54歳です。それが今、70年  
の間に30年間長生きをする国民になりました。今  
は男性81歳、女性88歳です。『ライフ・シフト』と  
いう有名なベストセラーを出したイギリスのリン  
ダ・グラットンさんが出した数値によると、今から  
12年前、2007年生まれの日本の子どもたちの50%  
は107歳まで生きる。それが最新の研究で言われて  
いることです。

人生100年時代と言うと、笑う方がいます。しか  
し、この日本の戦後の歩みを見たときに、70年前  
には50年しか生きなかった日本人がいまでは80年、  
そしてこれからは100年、こうやって見るとずいぶ  
ん見方が変わるのではないのでしょうか。

### 1) 昭和の社会保障改革

今、私は自由民主党の厚生労働部会長として社会  
保障改革に取り組んでおり、どういう社会保障改革  
の歴史を積み重ねてきたかを少しお話ししたいと思います。  
第1ステージは昭和です。昭和の社会保障改革  
で最大のエポックメイキングと言ってもいいのは  
皆保険、これに尽きると思います。

海外の方と話して、最も驚かれる一つはこれです。  
いつでも、どこでも、誰でも病院に行ける。この皆  
保険の制度がつくられたとき、なんと日本の消費税  
は0%です。こんなことをおこなった国はどこにも

ありません。今、来年のアメリカの大統領選挙に向  
けて、トランプ大統領と民主党のさまざまな候補者  
が出ています。ほとんどの特に左派系の方たちが訴  
えていることは何か。国民皆保険です。

今回、アメリカへ行って言いました。「ずいぶん  
国民皆保険で盛り上がっているらしいけれども、私  
たち日本はちょっと首を傾げながら見えていますよ。  
なぜかと言うと、私たちには50~60年前からあり  
ますから。しかも、その時代は消費税0%です。そ  
れが争点になっていること自体がおもしろいです  
ね」という話をする、皆さんぼかんとしています。

アメリカでは、国民皆保険を訴えると「なぜ国民  
皆保険なんかやるのだ。入らない自由がないじゃな  
いか」という声があがります。これが、日本人とア  
メリカ人の考え方の違いです。今、国民皆保険があ  
る日本で、入らない自由がないと訴える人がいるで  
しょうか。これが、日本の昭和世代が我々にやって  
くれたことです。このおかげで、今どれだけありが  
たいと思っている方がいるのでしょうか。

私も政治家になり、いろいろなことを調べて、一  
つの問題はこの制度のありがたみが国民の多くの皆  
さんに伝わっていない。これを伝えていくことが大  
きな課題です。いくら医療費がかかっても、上限額  
が決まっている。億万長者も、所得の高い方であ  
っても、高額な医療費がかかっても上限は毎月20万  
円ぐらいでしょう。一般の所得の方であれば毎月8  
万円です。あとは国が補填をします。しかも、3カ  
月間、8万円、8万円、8万円と続いたら、4カ月以

降はその半額の約4万円で済みます。私はこのことをよく「定額治したい放題」と言います。

この制度があることを国民が知るの、それを利用するぐらいの医療費がかかったときです。初めて「こんな制度があったのか」と知るのです。この制度をつくってくれたのが昭和の先人達です。

## 2) 平成の社会保障改革

平成はどういう時代だったのでしょうか。給付と負担の模索の時代でした。そうです、消費税0%でやってきたこの国を支えるセーフティネットが、高齢化、人口減少といったことによってなかなかバランスしなくなった。そして平成元年に出てきたのが消費税です。30年間で10%に上げるというところまでは決まった。30年間で10%です。今も引き続き、給付と負担のバランスの模索は続いています。

## 3) 令和の社会保障改革

令和になってこの時代、我々がしなければいけない社会保障改革の一つの大きな方向性は何かと言えば、人生100年時代の基盤をつくることです。私たちは、これをやらなければいけない。そこで私は厚生労働部会長として、先月、「新時代の社会保障改革ビジョン」という一つのビジョンをまとめました。

何を書いたかと言うと、平成の社会保障は第1の道、第2の道という社会保障の給付のカット、増税で何とか財政を回していくといった改革に明け暮れました。しかし、これからはそれだけではなく、第3の道も考えなければいけない。バランスを回復していく、バランスを正していく、リバランスです。支える側と支えられる側のバランスを回復するための、経済社会全体の構造改革をやらなければいけないと訴えます。

そのために三つの壁の打破が必要です。一つ目は発想の壁の打破、二つ目は年齢の壁の打破、三つ目は制度の壁の打破、これらをこれからおこなっていくということです。

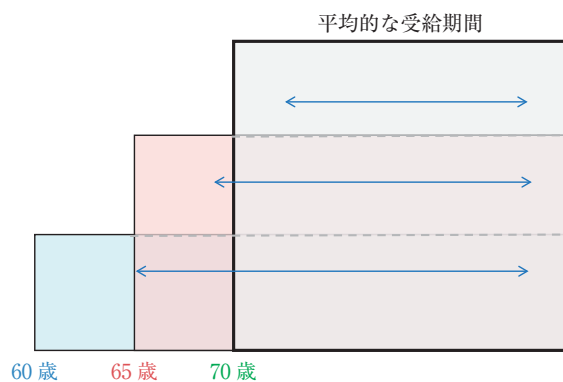
壁として象徴的なものを取り上げると、社会全体に今存在する壁の一つ、就労を阻害する壁の撤廃をしていきたい。つまり、働いても損をしない仕組みをつくることで、人生100年時代、長く働いても損をしない社会をつくっていく環境をつくりたいと思っています。その一つは年金の制度改革であります。私たちは、それを「人生100年型年金」と呼んでいます。その鍵となる二つを今日、紹介すると、①働くとも年金が減る制度の廃止、②受給開始年齢の柔軟化です。この二つが代表的なものです。

一つ目の働くとも年金が減る制度の廃止というのは、現在は年金をもらいながら働いていてある程度の所得があると、「あなたは、ある程度所得がありますから大丈夫ですね」ということで年金額がカットされます。この制度のことを、在職高齢年金といいます。私は、この制度を廃止する方向でやるべきだと提言にまとめました。

二つ目の受給開始年齢の柔軟化（表2）はどういうことかと言うと、これも残念ながら、国民にあまり知られていない制度の一つです。

せっかくの機会ですから会場の皆さんに聞いてみたいのですが、今の年金制度で60歳から70歳まで、いつもらうかは自分たちで選ぶことができることを

表2 繰上げ・繰下げ受給のイメージ



※世代としての平均的な給付総額を示しており、個人によっては受給期間が平均よりも短い人、長い人が存在する。

表3 繰上げ・繰下げによる増額率

	1カ月あたり	1年あたり	最大5年間分
繰上げ受給	0.5%減額	6%減額	30%減額 (60歳受給開始)
繰下げ受給	0.7%増額	8.4%増額	42%増額 (70歳受給開始)

※繰り上げによる減額率・繰り下げによる増額率については、選択された受給開始時期に関わらず年金財政上中立となるよう設定されている。





ご存知の方いらっしゃいますか？ もう一つ、まさに表3で言っているように、60歳でもらう選択をした場合、年金額は65歳でもらうよりも3割カットされる。70歳でもらう選択をした場合は、65歳でもらうよりも42%、年金額が増額される。このことをご存知の方、手を挙げてください…。半分いないぐらいですね。

皆さんなぜこれを知らないのでしょうか。それは厚生労働省が今まで伝えてこなかったからです。実際、70歳でもらい始めている人は1%しかいません。

なぜ1%か。もちろん生活が苦しい、そこまで我慢できない方が多いと思います。しかし、最大の理由の一つは知らせていないからだだと思います。

1カ月当たり早くもらうと0.5%減額、1年当たり6%減額、だから60歳だと、かける5で3割カットです。65歳から繰り下げていくと1カ月当たり0.7%増額、1年間で8.4%、かける5で42%増額、これが現在の制度です。私たちは受給開始の選択期間を、60歳から70歳ではなく、さらに後ろに延ばす提言をまとめています。一つの方向性として議論されているのは、65歳から75歳です。仮に75歳でもらうという判断をした場合、この単純計算でいくと約9割増額です。そういう形で、長く働くことが損をしないといった制度にしていくことも、年金改革の一つの取り組みです。

毎年、皆さんの誕生日にお手元にお配りしている「ねんきん定期便」というものがありますが、特に節目年齢といわれるところで国から届くものに、先月から“70歳で42%増額です”“大切なお知らせ”と書かれている紙が入るようになりました。私が厚

生労働部会長になってから「こういうことを皆さんに知らせなければいけない」と言って初めて入ったものです。人生100年時代に向けて国民の皆さんに選択肢をちゃんと届けていきたい。周知という部分で力を入れている一つの現れでもあり、紹介させていただきました。

#### 4. 現役の定義の見直しと「生涯現役社会」

年齢の壁を超えていかなければいけないという話の中で、今日皆さんにもう一つ考えてもらいたいのは、人生100年時代の中で必ず出てくる言葉、「生涯現役社会」という言葉です。

では、現役とは何歳から何歳まででしょうか。今この国の現役という定義は、生産年齢人口といわれており15歳から64歳のことをいいます。しかし、皆さん、本当に15歳で現役でしょうか、64歳で現役の終わりでしょうか。

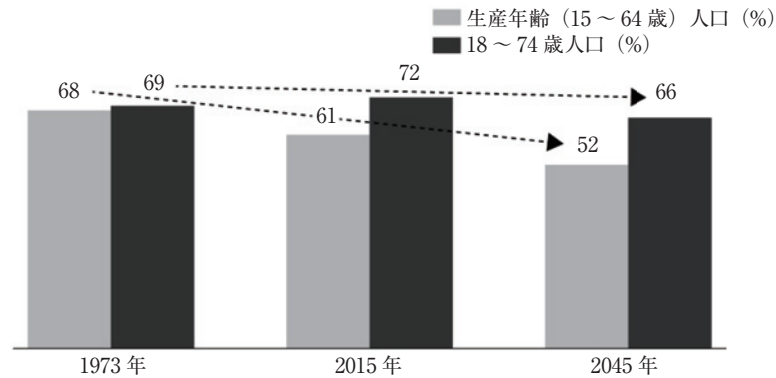
私は農林部会長もやっていたから、当時からすごく問題意識を持っておりました。いったい15歳でバリバリの農家で稼いでいる人が何人いるだろうか。農林水産省に、「全国の農家で、15歳で稼いでいる農家を調べてほしい」と依頼しました。そうしましたら、全国で約10人でした。

一方で、64歳が現役世代の定義の後ろです。しかし、今の日本の農業は、平均年齢が66歳です。一番平均年齢が高いのは、米農家の70歳です。農業の世界だけ見ても、このように現役という定義が合っていない。だから、この国の形を、今の現役という形で見ると誤るとというのが私の考え方です。

そこで何を考えているかという点、「ルールからの解放」でお示ししました現役の定義の見直しです。そのようなことも3年前からずっと議論しておりま

表4 生産年齢人口割合の推計

生産年齢（15～64歳）人口は2045年に52%にまで減少するが、18～74歳人口は現在と大きく変化しない



(注) 1973年度の値は総務省「人口統計」、2015年度・2045年度の値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(H24.1)による

人生100年時代の国家戦略 資料編より

す。

表4は生産年齢人口割合の推計を表したのですが、これは今の15歳から64歳という見方で見ると、1973年、約50年前と、2045年、今から25年後、労働力人口はこれだけ減るといえるのです。

これからの社会、人生100年時代は、今までの現役世代という形で見ると悲観的な見方ができるけれども、今の世の中に合った形で見えていくと言われるほど悲観的な未来は来ないと思っております。そのようなことを前提に世の中の仕組みを整えていくことを考えているところです。それに伴い変えていかなければいけないのは、社会保障改革だけではありません。働き方も変えなければいけない。

働き方は、昭和、平成、令和とどうなっているか。昭和の時代は企業戦士、モーレツ社員と言われた。「24時間戦えますか」といったバリバリ働いた時代だったでしょう。

それが平成末期になって、働き方改革というものが出てきました。一人ひとりに合った、多様な働き方が可能になるようにしていきましょうというものです。医師の働き方改革も、あと5年の猶予がありますが、2024年までには改革が進むことになっております。

令和の時代は、働き方改革がどうなっていくか。働き方にとどまらない、一人ひとりの生き方がこれから問われる時代になるだろうと思っております。今日、皆さんに最後に考えていただきたいのは、もし皆さん

さんが100年生きたら、これからどういうふうに分らしたい生き方をしたいと考えますか？ということなのです。

社会保障改革は、教育のあり方、働き方、経済社会全体の構造を変えていくことが必要だということですが、ようやく今、理解が広まり始めたと思います。さいごに

令和の時代、もう一度、再評価されるべき日本人の偉人は小林一三さん (Fig. 4) だと思っております。小林さんがつくり上げて、現在多くの人が利用しているもの、それは住宅ローンです。35年間、毎年お金を払えば多くの人が持ち家を持てる。お金持ちだけがマイホームを持てる未来はよくない。多くの人が持てる社会をつくりたい。その思いで住宅ローンという新しいサービスを開発しました。

その小林一三さんが83歳、人生最後のスピーチを東宝の社員の皆さんにおこないました。そのスピーチは、これからの働き方改革を含めて私たち日本人が忘れてはいけない大切なメッセージが込められていると感じております。ぜひ皆さんにも、それを共有していただければと思います。読みながら想像してください。83歳の小林一三さんが、ステッキを持って東宝の社員の皆さんに前から訴えている姿を想像しながら聴いてください。

久しぶりに諸君に会うことが出来て、まことに喜ばしい限りです。





ウィキクォートサイトより

Fig. 4.

私はね、これからの日本というものをいろいろ考えておるわけです。専門家の話も聞き、研究もし、この国は素晴らしい国になるという結論を持っています。

ただ！ただそうなるにはひとつ条件があるので。それはね、皆さんが全員働くことです。働くというのはね、働くというのは本来、とても楽しいことなのです。夢を描いてね、知恵を絞る、努力をする、その果てに笑ってくれる人がいる。

そしてその対価として報酬がついてくる。これがねえ、楽しい。いやもう、実に楽しいことなんです。自分の人生がここにあると感ずることが出来る。努力はね、絶対に報われなきゃなりません。

報われると嬉しいでしょ。立場が変わったら今度は報いようとするでしょ。そういう循環を持つ社会は、頼もしいことになると思うんです。皆さんは知らないでしょうね、働いても、働いても報われない、そんな時代が長く続いてしまいましたからね。

ですが、皆さんはとにもかくにも生き抜いてここにいる。生き抜いて今ここにいることが出来る。ここまで、今日まで来られたのだから、きっと遠くない未来、この国は頼りがいのある国になります。

この国で働くことが誇りであり、徳であり、物心両面に報われることが最も多い国になると思います。

皆さんなら必ず出来る、そう期待しています。どうも有難う、これからはしっかりやって下さい。

小林一三さん、83歳、高度経済成長に向かう前の日本で人生最後にしたスピーチでした<sup>注)</sup>。

働き方改革は、まさに医療の世界も2024年までの5年間で何とかやろうと。世の中では、先月から大企業が動きました。来年から、小規模、中規模、中小企業も動きだします。

この中で勘違いしてはいけないことは、この国は道を誤ってはいけないと思うのは、働き方改革は休みを増やすことではありません。ペースをスローダウンすることでもありません。働き方改革の真髄は、一人ひとり自分らしく働くことができる環境をどのように整えることができ、それが個人のパフォーマンスと全体のパフォーマンスの向上につながっていくことをどのように構築できるかです。

今日は昭和、平成、令和と、社会保障改革、働き方改革の歴史を少しさらいながら話をしました。この国が今あるおかげは何があったかと言うと、昭和、戦後何もないところから本当に必死に働いた、勤勉な日本人がいたおかげだと思います。

日本人は勤勉に働く。その良さは、これからも失われてはならない。それどころか人口減少の中でそれがさらに、モーレツ社員のように24時間戦えますかという形ではなく、一人ひとりが自分らしく働ける環境が整う形で、日本人の前向きに働くという意欲を生かせる社会をつくっていかねばいけない。

だから、人生100年時代、長く働くことで損をしない社会へ、日本なら必ずできる。そういう思いを持ちながら、改革、変革を訴えていきたいと思ます。

今日は、柴先生にこのようなお時間をいただきました。期待して呼んでいただきましたが、おそらく今後、私に出番はあまりないだろうと思います。

なぜかと言うと、今日お話ししたように、今年の8月まで10年間、ずっと政治家をやってきて、とにかくおこなってきたのは改革、変革です。私は現状維持には興味がなくて、いかに変化の先の明るい未来を見られるかということで、ずっと変革に力を

注) 昭和11年株式会社後楽園スタジアム(現、株式会社東京ドーム)の設立発起人代表は小林一三さんでした。

入れてきました。

厚生労働部会長になって約半年間、厚生労働部会としての取り組み、その前からの取り組みも、今の社会保障を守ることではなく、とにかく今の形に合わせて変えていくこと、変革に力を入れてきました。

おそらく私に出番はないだろうと言った意味は、今この国には大きな希望もなければ大きな危機感もないからです。何とかこのまま行くのではないか。大きく変えなくても、このまま行ければ一番痛みがないからありがたいという世の中では、私みたいな、とにかく変えたい、しかもスピード感を持って変えていきたいと訴える政治家はおそらくあまり必要とされないだろうと思いつつ、しかし、私は日本には変わる力があると信じます。

最初の今日の講演タイトル「日本を『未来変革』の国へ」に戻ると、私が一番変えたいことは日本の未来です。今を変えることではなくて、未来を変えたいのです。

この国の一番の課題は何だろうと考えたときに、私の中で「これだな」と思ったことは、私の世代や若い世代が自分の親や祖父、祖母世代と比べたときに、いい生活ができる、より豊かな生活ができると思っている人はどれほどいるのでしょうか。あまりいないと思います。

私は、それを変えたい。きっと今よりも将来はよくなる。そういう展望を築けるかどうか、私が一言で言う「未来を変革したい」その思いでもあります。

おそらく私の世代の間ではその実現が難しいかも

しれません。でも今日、私が話したように、あの昭和の世代の皆さんのおかげで、誰でも、いつでも、どこでも病院に行けるという世の中のセーフティネットができて、私たちは感謝しています。2100年ぐらいの日本人が振り返ったときに「令和になったあのときから100年時代の基盤づくりが始まって、あの世代の皆さんのおかげで100年生きて大丈夫だという国がつくられたのだ」。そう振り返られる、そんな政治の世界の改革に挑んでいきたいと思えます。

22世紀、2100年、「21世紀の前半に、いったい何を話しているのだ」と思った皆さん。今年は2019年です。男性の平均寿命は何歳ですか。81歳、ちょうど2100年です。

今年、街中や皆さんの周りにはいる子どもたちを見てください。皆さんのお子さん、お孫さんは22世紀に届くのです。それが、「レールからの解放」というペーパーの副題に「22世紀へ」と、政治の世界の文書で初めて「22世紀」と銘打った理由です。

22世紀に向けて、人生100年時代の基盤をつくるための社会保障改革をこれからも諦めず、「この国には変化が必要だ。この国なら必ずできる」という思いを持って、これからも活動していきたいと思えます。そのためにも健康でいたいと思えます。

自由民主党厚生労働部会長  
衆議院議員

小泉進次郎



おわりに

第 67 回日本化学療法学会総会会長  
公益社団法人日本化学療法学会理事長  
清田 浩

厚生労働部会部会長・小泉進次郎衆議院議員にお  
かれましては、大変ご多忙を極めておられるのに、  
ご講演を賜り、会を代表して御礼申し上げます。

日本の未来を明るく、我々にも本当に希望を与え

ていただきました。本当に感動して拝聴したと思  
います。先生のお言葉を信じて生きていきたい。私の  
場合はあと 35 年ありますが、頑張っていきたいと  
思います。これが最後だなどと言わないで、ぜひお  
越しいただいて希望を与えてください。どうもあり  
がとうございました。

令和元年 5 月 11 日